

さっぽろまちづくりトーク

平成 19 年 8 月 23 日 (木) 18 : 30 ~ 20 : 30
ホテルニューオータニ札幌 2 階「鶴の間」

次 第

- 1 開 会
- 2 市長メッセージ「市民自治が息づく、文化と誇りあふれる街を目指して」
- 3 座談会「市民の元気と市民の英知が、さっぽろの未来を創る」
司会者兼座談者 キャスター・地域まちづくりコーディネーター 林 美香子 氏
座談者 小樽商科大学ビジネス創造センター長 教授 海老名 誠 氏
札幌国際大学人文学部現代文化学科 教授 林 美枝子 氏
札幌市長 上田 文雄 氏
- 4 来場の方々からの質問・意見に基づく座談者によるフリートーク
- 5 閉 会

1 開会

司会 ただいまより、さっぽろまちづくりトークを開催をいたします。本日は御多忙のところ、多くの皆様に御参集をいただきまして、まことにありがとうございます。私は、本日の司会を務めさせていただきます札幌市市民まちづくり局の井上と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。（拍手）

本日のスケジュールでございますが、プログラムにもありますように、まず10分間、市長メッセージとして、上田市長からお話をさせていただきたいと思っております。その後、先生方をお迎えしての座談会に入ります。

座談会は、まずは1時間程度を市民によるまちづくりについて、各座談者の方にそれぞれの視点からお話をいただいた後に、後半30分程度を、皆様からの御質問をもとに座談者がコメントをする形で進めさせていただきたいというふうに考えてございます。

次に、配付をさせていただいております資料についての確認をさせていただきます。全体プログラムのほか、質問・意見記入票、アンケート調査票、ピンク色の「新しいまちづくりプランへの意見募集！」のチラシ、それから「『第2次札幌新まちづくり計画』策定過程における主な想定事業」と表題した資料をお渡しをいたしております。御確認をいただければと思います。

質問票は、座談会の後半に対談していただくテーマを皆様からお聞きするものでございます。6時45分ごろと8時ごろの2回にわたりまして、プログラムの節目で回収をさせていただきます。まちづくりについて御意見をいただければというふうに思います。ふだんお考えになっていることがございましたら、あわせて御意見をいただければということと考えてございます。質問票につきましては、繰り返しになりますが、スタッフの方にお渡しをさせていただきたいというふうに思います。

本日は、座談者と会場の皆様との直接のやりとりは時間を設けてございません。御意見や御質問については、恐縮ですが、この質問票を通してお伝えをいただければというふうに考えております。

なお、時間の都合上、すべての御意見を取り上げることができないというふうに思いますが、ちょうどした御意見につきましては、計画の検討、あるいは今後のまちづくりの参考とさせていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく御了承をいただければというふうに思います。

また、アンケートにつきましては、今後の施策の検討などの参考とさせていただきたいというふうに思います。御記入いただき、お帰りの際に出口のスタッフにお渡しをいただければというふうに思います。

また、第2次札幌新まちづくり計画につきましては、御意見を31日金曜日まで募集をさせていただきます。受付でお渡しを申し上げましたピンク色の「新しいまちづくりプランへの意見募集！」のチラシ、これは、後日でも御意見を記入していただきまして、切り取っておはがきとして送っていただけるような形になってございますので、一緒にお渡しを申し上げます。「第2次札幌新まちづくり計画」の主な想定事業の資料などを御参考になりながら、御意見をお寄せいただければ大変ありがたいというふうに思います。

2 市長メッセージ

司会 それでは、早速、札幌市長の上田文雄より、市長メッセージ「市民自治が息づく、文化と誇りあふれる街を目指して」と題してお話をいただきます。

上田市長、よろしく願い申し上げます。（拍手）

上田市長 どうも皆さん、こんばんは。本日は、まちづくりトークということで、多くの皆さんにこうして御参加いただきましたことを、心から感謝を申し上げたいというふうに思います。

私が札幌市政をお預かりするということになりまして丸4年が経過いたしました。過日、第2期目のスタートを切らせていただいたところであります。私たちの札幌市役所が、これからどんなまちを目指していくのか、市民の皆さんとともに、どんなまちを目指していくのかということ、私も皆さん方にお約束をし、そして多くの市民の皆様方から御意見をちょうだいしながら、その目標を実現するいろいろな方法を講じていかなければならないと、こんなふうに考えて、このトークもそういう意味での、新しいまちづくりをする、その御意見を皆さん方からもちょうだいしたいというようなことで企画をしたところでございます。アンケート用紙とか御意見というようなことでお配りをさせていただいております。どうぞ御自由に、こんなまちがいいなと、そして、今ある札幌市の状況を、こうした方がいいなというふうな御意見、いろいろあるかというふうに思いますが、ぜひとも、今日、座談をしていただく各皆様方のお話を聞きながらでも、ぜひ皆様方の御意見をお寄せいただきたいなと、こんなふうに思っております。

また、新しいまちづくり計画をつくるための資料といたしまして、今、さっとこのぐらいのことを考えていますよということ、（「『第2次札幌新まちづくり計画』策定過程における主な想定事業」を掲げて）お手元にこういうものが入っておりますので、これをごらんになりまして、もっとここをこうするべきだというようなことも、御意見をちょうだいしたいなと、こんなふうに思っております。ホームページにも記載がございますので、御意見をお寄せいただく場合に参考にさせていただきたいなと、こんなふうに思っております。

さて、私のまちづくりの目標というのは、市民の力が本当に生き生きと生かされて、そして、このまちで文化と誇りあふれる街・札幌をつくろうというのが一つの目標、スローガンになっているところであります。1期目の4年間に、私は、この市民の力みなぎる札幌のまちをつくっていかうということで、市民自治ということを生懸命努力をしてきたつもりでございます。まちづくりセンター、87カ所ございますけれども、ここで、自分たちのまちをしっかりと自分たちで、どうしたらいいのかという問題を発見し、そして、それを解決をする、そういうために、私たちは何をすべきなのか、そして何ができるのかということ、をさまざまな場面で考え、そして、ともに実行をしていくというようなことを目指したものでございます。たくさんの方々が趣旨に御理解いただきまして、まちづくりセンターを中心に、さまざまな活動が現在起こっているところであります。

テーマといたしましては、もちろん、まちの中で安心・安全ということが非常に大きなテーマであります。子供たちも、必ずしも、大きなまちになってまいりまして、安心して子供たちを育てることができない危険がある。あるいは、災害に強いまちをつくらなければならない、そんなことも、皆さん、最低限、このまちで生活するために、みんな安心で、かつ安全なまちにするためには、行政の力だけではなくて、一人一人の市民が自分たちの生活の場面で危険を発見し、それを防いでいく、そんな活動をしていかなければならない、こんな思いを持ち寄って、自分たちの力でやれることをやっていかう、そして、やれないことは、これは行政の力といったものとあわせて、さまざまな対策をとっていかうと、こんなことを今やっているところでございます。

安心・安全、そして快適なまちづくりということで、楽しい、そして、このまちがもっとすてきになるようにということで、このまちのまちづくりに皆さんが御参加いただけ

る、参加をすることによって、このまちがもっと身近になり、自分とまち、そして、ここに住む札幌市民相互の距離を縮めていくことができる、そして、自らをそこに生かしていくことができる、若いも若きも、そんな人々の集まりが、このまちをもっともってすてきなものにしていくことができるのではないかと、そんな思いで、市民の力がみなぎる、文化と誇りあふれる街・札幌をつくってほしいということにテーマを定めさせていただいたところでございます。

2期目もスタートをさせていただきましたけれども、テーマは同じでございます。それをさらに深めるために、多くの方々の御参加をいただきたいということでお話をさせていただいているところであります。

このまち、札幌のまちというものをさまざまな観点で私たちは世論調査をしているところであります。毎年、このまちは好きですか、郷土に対する愛着度といったものをはかる世論調査を札幌市役所はやっております。このまちは好きですか、このまちにずっと住んでいたいと思いますかという問いでございます。驚くことに、このまちの市民の皆さん方、その問いに対してイエスというふうにお答えいただく方が97%と。これは、ずっとそういう回答でございます。100人中97人が、このまちが大好きだ、そして、このまちにずっと住んでいたいと、こんな思いを持っておられる方々が札幌市民であります。

客観的に、このまちが本当にそんなに好きになれるまちなのだろうかというふうなことを考えたときに、昨年、東京のブランド調査という、地域のブランドを評価をしようというふうな、インターネットで全国で意見を集めてランキングをするという会社がございまして、皆さんも御承知のように、昨年、779、全国に市という単位の自治体がございまして、その中で札幌が最も魅力的であると、そういうまちに選ばれたということがございました。今年もその調査がございまして、779の市に若干の町、村を加えまして、1,000の自治体をリストアップをいたしまして、その中で魅力度調査といったものをやったところ、2年連続、札幌というまちが全国で最も魅力的なまちであるというふうな調査結果が出たところであります。新聞でも大きく報道されて、皆さん方も、そうかと、全国区で私たちのまちは評価をされているのだなと、こんな思いを持たれたのではないかと、というふうに思います。

市役所の私たちも、長年にわたる、先輩達がこのまちづくりをしっかりとやっていただきまして、そして、さまざまな社会的インフラが整い、そしてそこで快適な生活ができる、そういうまち、このまちに対する評価が、そんな意味で全国からあこがれのまちになる、そういうまちであるということに誇りを持ち、また、その意味等もかみしめると。本当にすてきなまちであり続けるためには何をしなければならないのかというようなことも含めていろいろ考えなければ、そういう考えを持つチャンスになったのではないかなと、こんなふうに思います。

世界からの評価はどうかと。これは、1972年、冬季オリンピックが札幌で開かれました。今から35年前でございます。一躍、札幌が世界にその名をとどろかせる、そういう一大イベントがございました。35年たちまして、今年の2月、ノルディックスキーの世界選手権大会がございました。47カ国からの選手団、役員を含めて、1,000名の外国人が札幌を訪れてくださいました。どの方々も、すばらしいまちだと、世界にこんなすてきなまちはない、美しいまちだというふうな、本当に感嘆をして、驚きの目で、私たちを評価をしていただきました。世界からもすばらしいまちだと、日本全体からもすばらしいまちだ、いいまちだというふうな言われている札幌。そして、このまちで住んでいる人たちの圧倒的多数がこのまちはすてきだと、ずっと住んでいきたいと、こんなふうな言われているまちというのは、本当に私は世界に類例がないのではないかと、そんなふうに誇りに思います。

でも、本当に一人一人の市民にとって、このまちが、本当に自分で誇ることができる、このまちとどう関係づけて自分があるのかということをしかり認識ができる、そういう力強い感覚といいですか、脈々と、生き生きとした、このまちに対する愛着といったものが本当にあるかどうかということについては、やはりもう少し考えなければならないのか

なというふうに思っております。

私は、これが実現する、アンケートでは好きだよ、そして、ここでずっと住んでいた、こういうふうに思われるということのもっともっと深いところで、市民の皆さん方が札幌市との関係をしっかりつくっていくということがこれから必要なのではないかと、そんなふうにも思っているところであります。客観的なすてきなまちも、一人一人の生活の中でそれが実現していくことができる、そんなまちづくりを私たちは目指していきたいというふうに思っております。子供たちを本当に育てやすいまちなのかな、女性の皆さん方が暮らしやすいまちなのかな、障がいを持った皆さん方が、このまちはとてもすてきな、暮らしやすいと本当に思えるまちなのかな、いろいろ私たちは活動をする中で、いろいろな感想をお持ちの方々が意見を率直に述べ合うことができ、そして、それにみんなで議論をして、一歩でも近づけていくようなまちづくり、これを私はやっていかなければならないと、こんなふうに思います。

それから、札幌市民はこのまちが好きだというふうに言っておりますが、北海道のほかの市町村の皆様方が札幌をどう思っているかということについても私はしっかり考えなければならぬというふうに思います。

私は、帯広の近くの幕別町という小さなまちで生まれ育ちました。当時から、今もそうだと思いますが、札幌を見る目というものをどう感じていたか。あこがれのまち、大きいまち、大き過ぎて自分のまちとは比較もできない、そんなまち。遠い存在、北海道の誇りだというふうに、帯広にいて帯広の人が言えるか、釧路にいて、稚内にいて、根室にいて、札幌って本当にいいまちだなと言えるかというふうな問いかけをした場合に、必ずしも、関係ないねという人が結構いるのではないかと、私はそんなふうにもちょっと思うところがございます。札幌のまちづくりはどこを向いていたのかな、北海道に本当に向いていたのかな、そんなこともこのごろ考えております。

もっと私たちは、この北海道の中にある札幌というまちが、北海道のどこに住んでいる方々ともいろいろな意味で連携をし、そして、北海道がもっともっと住みやすくなる、札幌があればこそ北海道の皆さん方が本当にさまざまな活動ができ、あるいは期待ができ、希望が持てる、そんなまちとしての札幌、さまざまな市や町や村と連携をしていけるような、そういうことに目を向けたまちづくりも、またしていかなければならないのではないかと、そんなことを最近考えているところであります。ぜひ多くの皆様方のまちづくりに対するイメージを今日お聞きして、そして、みんなで考えていきたいと、そんなことを思っているところでございます。

時間が参りました。最初のメッセージということでお送りいたしました。これから座談ということで、講師の皆さん方と一緒に皆さん考えていっていただければありがたいなというふうに思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

司会 上田市長、どうもありがとうございました。

続きまして、座談会に入っていきますが、この時間を利用いたしまして質問票の回収を行おうと思います。御記入いただいた方は、お近くのスタッフにお渡しをいただければというふうに思います。

それでは、座談者の皆様に御登壇をいただきたいというふうに思います。準備が整いましたら、御登壇をいただければと思います。

それでは、よろしくお願いを申し上げます。皆様には、ぜひ拍手でお迎えをいただければというふうに思います。（拍手）

3 座談会

市民の元気と市民の英知が、さっぽろの未来を創る

司会者兼座談者	キャスター・地域まちづくりコーディネーター	林 美香子 氏
座談者	小樽商科大学ビジネス創造センター長 教授	海老名 誠 氏
	札幌国際大学人文学部現代文化学科 教授	林 美枝子 氏
	札幌市長	上田 文雄 氏

司会 本日の座談者の先生方を御紹介をいたしたいと思います。

向かって左側、本日の座談会の進行もあわせてお務めをいただきます、キャスターで、地域まちづくりコーディネーターの林美香子先生でございます。（拍手）

そのお隣、小樽商科大学ビジネス創造センター長・教授の海老名誠先生でございます。（拍手）

そのお隣、札幌国際大学人文学部現代文化学科教授の林美枝子先生でございます。（拍手）

最後に、上田文雄札幌市長でございます。（拍手）

座談者の皆様のプロフィールにつきましては、お手元のプログラムに記載をさせていただいております。

それでは早速、「市民の元気と市民の英知が、さっぽろの未来を創る」と題しまして、座談会を始めたいと思います。

以降の進行につきましては、林美香子さんをお願いしております。

林さん、よろしく願い申し上げます。

林美香子氏 皆様、こんばんは。たくさんの皆さんにお集まりいただき、どうもありがとうございます。今、御紹介いただきましたが、今日、進行、そして座談者として参加させていただきます林美香子です。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

今日は4人の皆さんと一緒に話を進めていくのですが、実は林美枝子先生と一字違いということで、今日は、林美枝子先生のごことは林先生とお呼びして、私のことは林さんと呼んでほしいなと思います。よろしくお願いいたします。

先ほども御案内がありましたけれども、今日の座談会は、前半の1時間、この4人でトークを進めてまいります。そして後半の30分、御来場の皆さんからの御質問とか御意見に対して私たちが答える時間として考えております。後半に入る前に、もう一度皆さんから質問用紙を集める時間を設けておりますので、いろいろなことをぜひ、こんなことを聞いてみたい、私はこんなふうに思っているという御意見を書いて、集めていきますのでスタッフにお渡しくださいませ。

なお、時間の関係で、会場の皆さんと座談者の直接のやりとりの時間というのは設けておりませんので、ぜひお聞きになりたいこと、そして御意見がありましたら、質問用紙の方にお書きください、よろしくお願いいたします。

では、早速始めていきたいと思いますが、今日のテーマが「市民の元気と市民の英知が、さっぽろの未来を創る」。今、市長さんからのメッセージにもありましたが、まちづくりにおいては、一人一人が主体的に考えて、課題解決に向けて自ら行動し、市民が主役となって協働で取り組んでいく市民自治というあり方が注目されています。札幌市でも、今年の4月から自治基本条例が施行されて、情報共有と市民参加を軸としたまちづくりの推進が進められています。こちらの「広報さっぽろ8月号」でも市長さんが登場して、いろいろ説明があるのですが、皆さん、お読みになっていますか、どうですか。今日お集まりの方はこういうものでちゃんと勉強なさっているのかなと思いますが、まだ読んでいないという方は、ぜひ、おうちに届いていると思いますので、こちらの方もお読みい

ただきたいと思います。

まちは市民みんなで作るもの、そうした考えをもっともっと広げていくにはどうしたらいいのでしょうか。また、札幌を、より活力のある、すばらしいまちにしていくためにはどうしたらいいのでしょうか、私たちでいろいろ考えていきたいと思います。そして、皆さんたちからの御質問や御意見もお待ちしています。今日は皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

お集まりの皆さんに少し質問をと思うのですが、今日お集まりの皆さんたちは、町内会活動とかNPO活動、ほかの市民活動などでまちづくりに参加しているよという方、ちょっと手を挙げていただけますか。(挙手)

多いですね。そろそろ自分もやりたいなと思って今日は参加したという方もいらっしゃいますか、どうですか。(挙手)

そういう方たちもいらっしゃいますね。ぜひ、今日をきっかけに、またまちづくりに参加をしてほしいなということも思います。

では、最初に、座談者の皆さんたちに、自己紹介も兼ねて、市民と行政、また、まちづくりのかかわりの面から日ごろ感じていることなど、また、一市民としてどんなふうにお感じなのかといったことも含めてお話ししていただきたいなと思います。

それでは最初に、林美枝子先生にお願いしようと思いますが、林美枝子先生は、さまざまな審議会の委員としても札幌市のまちづくりに参加をなさっていますが、どんなふうにお感じでしょうか、お願いいたします。

林美枝子氏 林でございます。多くの方とは多分、初めましてという状況だと思うのですが、私は日ごろ、審議会だとか、あるいは懇話会等で行政の方と会うチャンスが非常に多いのです。

実を申しますと、同じことをほぼ毎年やっているのですけれども、でも、年によって、実は動機づけが全く変わりますし、結果も大変変化いたします。それはなぜなのかなとも思っていましたら、やはり行政とか市とか道とかと私たちが集合的にとらえているものでも、実際にそれを実施するのは一人一人の個人だからなのだとということがわかりました。今回の、この担当になった方は信頼の置ける方だな、この人は、ふだんからこの審議会が目指しているようなことを実際にもやっている人だなという人と組んだ年は非常にうまくいくのです。ところが、たまたまその立場に来て、今から勉強させていただきますという行政の方と組んだ場合は、同じ一年間でも成果がまるで違うのですね。

私は、市が何をしてくれるのか、行政が、というとらえ方ももちろんあると思うのですが、公と私だからですね。しかし、その公を担っているのも同じ市民なのだという視点が大変重要だと思うのです。では、例えば、札幌市の市民が、あるいは他の公務についている方たちが、例えば札幌市がこのような方向性で市民自治を目指しているのです、あるいは、市民活動ネットワーク、組織づくりに一人でも多く課題を持って参加してくださいという声に、どれだけ個人としてこたえているのかということが大変重要なのだろうと思うのです。つまり、公も私の集まりだということです。

ただ、またもう一方で、委員会や、あるいは懇話会の会長をやっておりますと、公募委員という方たちが参加してまいります。多くは専門の主婦の方であったり、あるいは退職した後の方が参加してくるのですけれども、なかなかやはり個人的な視点から出ることができないという欠点を日ごろ感じております。私はどう思うのかをもちろん求めてはいるのですが、私の事情はどう思うのかという意見を言ってくれないと、せっかく15分の1の席が、やはりもったいないだろうと思うのです。だとすると、公にいる人も、私個人としての、あなたの活動といったものを常に振り返ってほしいという問題、そして逆に、私である私たちも、公としての意見、あるいは公としての別人格を、自分の人生や、あるいは24時間の中で多く持つということが大変重要なのだろうなというふうに思います。

先ほど市長さんのお話の中で、私は大変納得したことがございまして、それは何かと申しますと、北海道という視点が、例えば札幌市のまちづくりに欠けているのではないかと

ということをおっしゃられました。私はいつも文化人類学という学問をやっているものですから、事例を求めているいろいろな社会に出かけていくわけですが、事例そのもので物事はわかりません。一つ一つの事例には、意味づけられたものとしての位置がございまして、では何が意味づけるかといったら、文脈が意味づけるのです。すると、札幌市を意味づけるものは、実は文脈としての北海道であったり、日本であったりするのだろうなというふうに思うのですね。

すると、先ほどおっしゃっていた、そういったものに配慮したまちづくりを行政がするためにはどうしたらいいのか。一つには、多分、市民のみを見てはいけないということだと思ふのです。3人に1人は札幌市民ですが、3人に2人は、道民ではあっても札幌市民ではございません。しかし、その人たちも、多分、札幌にあこがれ、札幌の利益を享受する人たちだろうと思ふのですね。すると、例えば市民自治ということ考えたときに、必ずしも、ここに生まれ、ここに育ち、ここで税金を払っている人たちを市民と認知するだけではなくて、もう一步、二歩、後ろに下がりました、一時的な市民、ここで学んでいる、ここで働いている、ここにあこがれているといった人たちも札幌とどうかかわっていただけかといった視点を、いつも行政も私たちも持っていなければならないのではないかなと思ふます。

札幌市が何を預かっているのか。北海道という文脈の中で、日本の北という位置の中で、何を預かっているのかということについていつも認知しながらまちづくりをしていかなければいけないのではないかなというふうに思っております。

林美香子氏 ありがとうございます。

今のお話の中で、行政の担当の人によって審議会の進みぐあいも違うというのは、なるほどというふうに思いましたし、また、市民が公の意識を持つことの大切さ、よい意味での市民にみんながなっていくないと、市民自治の本当の形にはならないのだなということも今思いました。ありがとうございます。

続いては海老名先生ですが、海老名先生は、実は海外での生活がすごく長くいらして、34年ぶりに札幌に戻られたということなのですが、そうした海老名先生からごらんになって、札幌の市民と行政、まちづくり、どんなふうに映っているのでしょうか、お願いいたします。

海老名氏 皆さん、初めまして。小樽商科大学の海老名です。

今、林さんから御紹介いただきましたように、私は、実は大変長い間、外国で勤務をしたり暮らしたりして、3年前にふるさと札幌に戻ってまいったわけです。34年ぶりに札幌に戻ってきましたものですから、随分、自分が育った時代と、余りにも、一見立派になった札幌との間に、何か違和感を覚えたりすることもございますので、今日は、ちょっと林先生のような立派なことは私はとても申し上げることができないのですけれども、変わったことを申し上げるかもしれませんが、よろしく願いをいたします。

私は、いろいろな国で暮らしてまいりまして、市民と行政の関係という、余り真正面から考えたことはなかったような気がいたしますけれども、改めて問われてみますと、理想的な関係というのは、こんな立派なホテルではなくてもよろしいのですけれども、よいホテルに滞在しているような感じではないかというふうに思ふます。それは、具体的にはどういふことを言いたいかという、ふだん、毎日の普通の生活をしている間というのは、特に行政がというようなことを一々意識しないでも暮らしていける。安心して、安全な環境の中で平和に暮らしていけるということだろうと。しかし、やはり有事のとき、我々が助けを必要とするときには、タイミングよく必要な支援の手を差し伸べてくれる、そういう関係が市民と行政というところでは一番理想的なのではないかなというふうに思ふます。

よいホテルというような言い方をしましたけれども、実は、皆さん、いろいろなホテルにお泊まりになって、例えばすばらしく立派なシャンデリアがあると、豪華なロビーが

あるとか、そういうところがよいホテルではありませんよね。やっぱり、よいホテルというのは、実は、お客様を見ているぞというふうには見せないのだけれども、お客様が今、このサービスが必要だと思ったときに、すごく自然に、タイミングよくそのサービスを、手を伸べてくれる、そういうホテルがよいホテルであり、かつ、ホテルのランキングでも上位にランクされます。つまり、やはり、基本的には行政から清潔で安全な環境が提供されていけば、ふだんはそれでよろしいと。あとは、市民が困ったときに、必要な支援の手をタイミングよく差し伸べてくれるような関係が一番いいのだろうというふうに思います。

しかしながら、清潔で安全な環境と簡単に言いますが、これは行政の努力だけでももちろんできるはずありません。自分のまち、自分の地域を、清潔に、安全に保つためには、住民側に高い民度が求められると思います。自分は当然ごみを出す、市は当然掃除をするものだ、というような感覚は絶対にだめですね。昔から衣食足りて礼節を知ると言いますが、今、日本と私が長い間かかわってきたアジアとは、そこが一番違うのだろうなというふうに思っています。日本ももちろん、戦後の復興期の時代には、食べることに精いっぱいな時代がありましたけれども、今、日本は衣食足りた状態になっています。でも、アジアの多くの国は、まだ衣食足りたというレベルにはなっていません。やはり、貧富の差が非常に激しい国が多いですから、皆様が観光で行かれるようなところでは、もう、すばらしい金ぴかのホテルがあります。でも、その裏に回ってみると、すごいスラム街があったり、危険な地域があったりしているのが今でもアジアの実態と言わざるを得ないと思います。

そういうふうに考えると、日本全体にもう、そういうスラム街などというものはないと思いますし、中でも、先ほども市長も御披露されておられましたように、札幌というまちは、私が世界じゅうで暮らしてきても、特にすばらしいまち、清潔で安全なまちだと言えます。

今の日本は、必要な物資、そういうマテリアルはあるわけですから、あとは私たちの内なるもの、礼節とか教養といいですか、市民の民度が問われているというふうに思います。自分たちのまちは、自分たちの努力と参画で、世界に誇れるような清潔で安全なまちにしていくのだという覚悟と決意が必要だと思います。

本当に、34年ぶりに戻ってきて、この札幌という恵まれたまちに住むことに感謝をしながら、私自身も改めて、自分でできることをやっていくということが大切なのだなというふうに感じている今日このごろであります。

林美香子氏 ありがとうございます。

民度の高い、一言で言うと、よい市民というのでしょうか、まちづくりを考え、公的なことを考える市民でありたいなということ、今お話を伺っていて思いました。

済みません、市長さんより前に、私が先に市民の一人として、座談者として発言をさせていただこうと思うのですが、そういう意味では、今日、200人ぐらいの方がお集まりだと思えるのですが、私は、もっともっと集まってほしいなということを思います。というのは、やはり190万人という人口の多さのせいもあるのかもしれませんが、どこか、市民一人一人のまちづくりへの意識というのが、まだ弱いのではないかなと思うことがあるのです。というのは、ほかの道内の町などに取材ですとか視察に行きますと、3,000人とか4,000人という町がたくさんあります。そういうところでは本当に、住民の一人一人が真剣にまちづくりに取り組んでいるのですね、取り組まざるを得ないということがあると思うのです。その点でいくと、ちょっと札幌は、だれかがやってくれるかもしれないという気がするのかな、ここで、もっともっとたくさんの人に集ってもらいたいなということも思います。

また、市民と行政が一緒にまちづくりをしていく、協働でまちづくりをしていくためには、それを進めるためのシステムづくりということも必要だと思います。先ほど審議会の公募委員の話が出ていましたが、こうした公募委員をもっともっと広めていくことで、た

くさんの市民が経験することで、やっぱり公的な意識というのが高まっていくのだと思います。また、早い段階から参加できるシステムづくりということも必要ではないかなと思います。

さらに、こうしたまちづくりトークなど、草の根的な地域でのまちづくりの勉強会というの、もっともっと必要なのだと思います。私は、地域づくりに関する取材をして全国を回っているのですけれども、地域づくりの先進地と呼ばれるところは、本当に地道な、住民参加の仕掛けだったり、勉強会を長くやっているのです。突然いいまちづくりというのはできないというのが本当にわかります。ですから、こうしたさまざまなまちづくりの勉強会などもどんどん開いていく必要があるのかなと思います。

それと、市民の頑張りと同時に、私はやっぱり行政の頑張りも期待したいなと思います。今日のテーマは「市民の元気と市民の英知が、さっぼろの未来を創る」というふうになっていますが、ここには、実は透かし文字というか見えない文字があって、市民の元気と市民の英知、プラスやる気のある行政ということが隠れているのではないかなと思っています。やっぱり市民と行政一緒のまちづくりということが大切だと思います。

先ほど林先生からも御指摘がありましたけれども、1万5,000人いる札幌市の職員が、職員としてだけではなく市民としてまたまちづくりに参加したら、これはものすごい力になりますよね。実際今、私は、市民活動として、モエレ沼公園の活用を考える会ですとかスローフードの運動をしているのですが、その会の活動にも市の職員の皆さんが参加してくださっていて、大いに力を発揮してくださっています。

少しだけ、モエレファンクラブ、モエレ沼公園の活用を考える会の活動も紹介したいと思うのです。

この会は、モエレ沼公園がイサム・ノグチがデザインしたすばらしい公園ですが、この公園を未来にもっとすてきな形で引き継いでいきたいと思ってつくった会なのです。なぜこの会ができたかという、実は2003年の7月に、モエレ沼公園の中にガラスのピラミッドがオープンしました。そのときに、私たちはイサム・ノグチの彫刻展を開きたいなと思って、市の方にお話に行きました。ただ、そのとき、市には全く予算がない、予算を考えていないのでできないという話だったのです。でも、せっかくイサム・ノグチがこうしたすばらしい公園をつくってくれたのだから、彫刻展を開きたいということで、市民と、また民間の企業の方にもいろいろ寄附を仰いで、本当に市民と、そして行政と一緒にイサム・ノグチの彫刻展を開くことができました。そのときに思ったのですが、やはり厳しい財政状況の中で、市だけではもうまちづくりができる時代ではないのです。市民と行政が本当に手を携えてまちづくりをしていかなければいけない時代だなというのを実感として持ちました。なので、私は、こうしたまちづくりトークをきっかけに、これからまちづくりをしたいという方も大勢いらっしゃるようなので、ぜひまちづくりに一歩踏み出してほしいなというふうに思っています。

というふうに、3人、市民の意見を述べたのですが、今度は上田市長さんにお話をしたいなと思います。お願いいたします。

上田市長 どうもありがとうございます。とてもいろいろな角度からお話をちょうだいしまして、大変参考にさせていただいております。

自分の置かれている環境と自分をどうやって結びつけていくかということをしっかりやらないと、幸せも不幸せも遠い存在になってしまうのではないかなというふうに思います。リアリティーを持ってというか、現実感というものは、何かを積極的に自分と関連づけていかないと認識がなかなかできない、あるいは認識を深めることができないというふうに思います。そんな意味で、人が動くということ、人と関係づける、関係を求めていくということ、何とか関心を持ってもらって、そして市役所の仕事といったものも御理解いただいて、一緒にやろうかなという気持ちを持ってもらえるような、そんな札幌市役所の仕事をやっぱりやっていかなければいけないのだろうと、こんなふうに私は思っております。

一般的に、札幌市役所に限らず、私が一人の市民であったときに感じていた役所の仕事というのは、やっぱり、ちゃんと法令に従った、法に基づく行政という概念がございますので、法律に従った、あるいは条例に従った仕事をちゃんとやっていけば、それでよしというふうに思われてきたのではないかと思います。どんなに不親切にやっても、正しくやっていけばオーケーという、そういう行政ではなかったらどうかと。でも、ちょっとそれでは足りないぞというふうに私は思っております。

自分たちのやっている、公務員がやっている仕事を、どうやって具体的に市民の皆さん方に理解をしてもらうか、そして、本当に市民のために役に立つ仕事をやっているのだということを市民に理解してもらおう努力、これをしないと、お互いに不幸な関係になるというふうに私は思って、就任してすぐに、市役所の職員の皆さん方に、皆さん方の仕事が、市民がどういう思いを持っているのかということをやっと考えてみようよということをご提案させていただきました。そんな中で、もっと自己アピールする、自分の仕事を説得して、納得してもらおうということにもう一つの仕事があるということですね、理解しようということを行いました。

例えば、民間ですと、いい製品をつくっていても、それがいい製品である、だから買ってみようという気持ちを持ってもらわなければ仕事は完了しないのですね。それと同じように、いい仕事をしても、それを市民の皆さん方が、ああ、いい仕事をやってくれているというふうに思ってもらわないと仕事は完了しないのだ、だから、親切に、懇切丁寧に、自分の仕事をちゃんとアピールするようにしようということで、情報公開という概念がございますが、情報公開は、尋ねられれば答えるという制度であります、そうではなくて、情報提供、しかもわかりやすく、しっかりと、こういうことを今やろうとしているのです、いろいろ矛盾もあるかもしれないけれども、御意見は承ります、しかし、こういうことをやろうとしているのです、いいことでしょうかというふうに言える仕事のやり方をしていこうということで、いろいろな工夫をしてきたつもりであります。そして、窓口の対応も含めて、行政が変わったぞというふうに言われるように、しっかりと仕事をやっていこうではないかということで努力をしてきたつもりであります。

おかげさまで窓口においでになる市民の皆さん方のアンケートをとりますと、満足度が、これまでとは違うぞと、よくなったというふうに思っただけの方が85%から95%ぐらい、区役所によっていろいろ違いますけれども、かなりの高率で変わってきたというふうな評価をいただいております。そういう評価をいただいているよということを私たちが職員にちゃんと知らせて、確かな変化というものを市民は評価してくれている、私たちの政府である札幌市役所は、私たちのために頑張っているのだぞということをお知らせしてもらいつつあるよということ、しっかりと市役所の職員に、私の情報を提供しているというふうなことを今頑張っているところであります。

先ほどの「広報さっぽろ」をお読みになりましたでしょうかという問いに、どれぐらい読んでいただいているかと。必ず読んでいただけるという方が、今、55%ぐらいです。これは、全体から言えば相当高いと私は思います。でも、まだ半分です。これがもう少し、今、札幌市がやろうとしていることを、この情報誌、毎月こんな厚い情報誌を出しているほかの政令市はないのですね。非常に詳しい情報誌を今提供させていただいておりますし、これまでの情報誌と違って、決まったことをお知らせするのではなくて、これからどうしましょうかということをお知らせいただく材料を提供させていただくというのが、今、新しい、私になってからの「広報さっぽろ」の作り方にしております。

まず、今までこういうお知らせがありますよということももちろん大事でありますので、そのことは置くとして、必ず第1ページ目、2ページ目に特集というものを組みまして、札幌市、例えばオリンピックの問題も、夏季オリンピックを誘致しましょうかどうか、非常に困っているのですよと。これをやると、こんないいこともあるし、こんな負担もありますよというようなことを市民が今選ばなければいけないのだということを情報提供させていただいたり、あるいは、市電の、これを存続させるためにはどんな問題があるのか、クリアしなければならぬ問題はどんなことがあるのかというようなことを、やは

り具体的に問題を提起していくといえますか、そういうことで、まちの一人一人の市民が主役になって、自分たちの問題として、このまちの問題を考えることができる、そんな札幌のまちづくりの資料になるようにしていきたいなということで頑張っているところであります。

ぜひ、そんな意味で、情報をしっかりキャッチをしていただいて、そして、それをもとに、いろいろな場面で、御家庭でも、あるいはお隣近所でも、話し合いの材料にしていただいただけると、ここがこうなっただ方がいいよねというふうな気持ちを語り合っただけ、そんなまちづくりに役立つといえますか、貢献するとか、あるいは自分を生かすとか、そういうまちになっていくことを私は期待をするし、そして、市役所の職員が1万5,000人おります。全体の1%ぐらいですね、189万人ですから、こういう市役所の職員が、まちの中でいろいろな情報を発信したり、あるいは情報を吸収したりしてくる、そういう役割も持っているということ、御指摘のとおり、やはり私たちはしっかり認識してやっていかなければならないと、こんなふうに思っているところであります。

林美香子氏 ありがとうございます。

では、今度は、札幌の魅力やまちづくりの可能性ということでお話を伺ってはいかがでしょうか。先ほど上田市長さんからのメッセージの中にも、本当に札幌市民は札幌が大好きなのだと知って、うれしくも思ったのですが、自然だったり、文化だったり、町並みだったり、本当にいろいろな魅力を皆さん感じて、また、札幌の持つ素晴らしい魅力を守ったり、はぐくんたり、外に情報発信したりすることで、自分が住むまちの魅力をもっと多くの人たちに気づいてほしいといった活動もたくさん見られます。そういった活動が、また札幌の活力を生み出しているのだなというふうに思うのですが、今度は、その札幌の魅力と市民の活力やアイデアが反映される、市民主体のまちづくりといった視点からお話を伺ってはいかがでしょうか。

今度は海老名先生にお話を伺おうと思うのですが、先ほども34年間海外で経験なさって、でも札幌は素晴らしいというお話があったのですが、34年海外で暮らされた後、札幌に来てみて、札幌はどんなふうに、先ほどは、随分前と違ってしまった面もあるようだけれどもというお話をなさっていたのですが、どうでしょうか、札幌は。

海老名氏 ちょっと訂正をさせていただきます。34年ぶりに札幌に戻りましたけれども、その半分ぐらいが海外でございました。私は、生まれも育ちも札幌市中央区ですが、随分長いことふるさとを離れておりましたので、外から見た札幌という意味では、かなり札幌のことがよく見えました。本当にいろいろなところに暮らしてきて、世界の中でも札幌は本当に素晴らしいまちの一つ、これはもう間違いがないことです。

私は、主として後半はアジアをいろいろと調査をしてきましたので、貧しいと言われていたアジアが、今どんどん豊かになってくる過程をつぶさに調べてきたのですが、アジアとか中国がどうしてこんなに経済が力強く発展できるのかということ調べていくうちに、確信を持ったこと、自分たちだけで発展してきたわけではない。外国の企業とか、外国の労働力とか、外国の資本とか、要は、外資と一緒にみんな発展してきたのだということがはっきりとわかりました。ですから、私が今から申し上げることは、突拍子もないことだ、随分変わったことを言うなと思われるかもしれませんが、お許しいただければと思います。

私は、札幌は、これから国際都市になれるし、なってほしいというふうに強く思っています。札幌というところは、もちろん国際空港からのアクセスとか、地下鉄などを含む都市機能とか、周辺の自然環境とか、観光スポットの魅力とか、文化の発信基地、どれをとっても世界に通用する国際都市としての資格を十分に持っていると思います。せっかく現実にこれだけの素晴らしいインフラを持っていながら、私たちはその札幌の魅力というものを世界に向けて十分にPRしているのでしょうか。このように、例えば友人などに問い

かけると、いや、随分やっているよと。例えば冬のさっぽろ雪まつりとか、夏のよさこいソーラン祭りとか、随分知られて、全国ブランドどころか、もうかなり海外からのお客様も大変多くなっているからという声が聞こえるわけですけども、私の言う国際都市・札幌というのは、観光はもちろんなのですが、それにとどまらずに、本当の国際都市になってもらいたいという意味です。

北海道にとっては、第1次産業に加えて観光という産業がこれからも本当に大事になってくる。特に札幌とか、私の大学のある小樽とかにとっては、これはもう本当にそういうことだと思えるわけですが、やっぱり、それだけでは、このまちというものをつくっていく上では十分ではないと思っています。やはり、実際には、もっと多くの外国の企業が札幌に進出してきて、そこで働く従業員たちが札幌に住みついてくれて、来年のサミットのことがすごい話題になっていますけれども、あんな大きな会議はなかなかありませんけれども、大小さまざまな国際会議が札幌でいつでも開かれていて、加えて、一時は大変盛んだったとも聞きますけれども、ロシアとか中国とかの貿易がまた再び元気になって活性化する、そんなような国際都市・札幌のことをイメージしています。

やはり、こちらに帰ってきて私は非常に、もう、99%うれしくて仕方がないのですが、1%どうしても悲しいということは、経済が残念ながら全国でも断トツに悪い。有効求人倍率も全国の半分ぐらいいきりありませんし、あらゆる意味で遅れていますね。そういうことを元気に戻していくというのは、札幌ですら人口が減っていく時代に入ってきた。私の大学のある小樽は、もうとまらないですね。私が在学していたときに20万人だったものが、今は14万人を切ってしまいました。この札幌だけが北海道の中で増え続けてきたはずなのですが、いよいよ減る時代を迎えると。そういうところで、経済が元気になる、まちが元気になるというのは、自分たちだけで落とし前をつけようと思ったら無理だと思います。やっぱり、アジアとか環日本海の対岸にあるロシア、中国とか、そういう企業とか人たちと一緒にあって、助けてあげるところは我々が助けてあげるし、助けていただくところは助けてもらおうと、そういう、広く我々が心を開いた関係で、この札幌がこれから国際都市として伸びていくということが可能になるのだろうと思います。

やはり、地政学的にいても、ロシアの極東とか中国の北東部に近いということは、今後、我々さえこの受入体制を整えていきますと、日本にとって必須のエネルギーとか、木材とか、食料の輸入基地として、北海道は大変いいところに位置していますし、こちらからまた向こうに輸出する基地としても、良港にも恵まれていますし、地政学的にも非常にいいというふうに言えるところなのですね。ただ、やっぱりそのためには、外国人が住んで心地よいまちになっているだろうかというふうにと考えると、残念ながら、もう少し工夫が必要だなと思います。

お時間があれですけども、例えば千歳に降り立った外国人が、ひとりで、今日、この会場に来れるでしょうか。このホテルはすごく有名ですから来れるかもわかりませんが、なかなかそうならないと思うのです。すごくわかりやすい晝盤の目にはなっているのですが、そのブロックの中の番地の表示がないのです。私が7年間住んだニューヨークは、全部すべての建物に番地が振ってあって、かつ、番地が全部連続していますから、自分の行く番地が、何番、何番とたどっていくと、必ずたどり着くことができますけれども、その辺も、ちょっとした工夫なのですけども、外国人に優しいまちを目指すことができる。せっかく地下鉄に、東西線ですとT01、02、03と、すばらしい工夫だなと思って、私は琴似なので乗っているのですが、日本語の後に英語が流れるのですが、例えば琴似はT03なのなのですが、T03と英語で言ってくれないのです。せっかくあんな工夫までしたのに、最後のところでかけているじゃないかと思って、とても残念に思います。

ですから、外国人に優しいまちにする。そうすると、これだけすばらしい基礎インフラを持っている札幌ですから、もっともっと多くの外国人が、観光だけではなくて、ここに住むというインセンティブがたくさん出てくると思います。

林美香子氏 ありがとうございます。また後ほど、経済、そして国際都市というあたりは伺えたらいいなと思います。

続いて、林美枝子先生にお願いしようと思うのですけれども、まず札幌の魅力のお話からお願いいたします。

林美枝子氏 私は自分の大学で留学生の支援をしております。短期留学を終えた学生さんを、ここ1週間、千歳まで送っていくことをやっているのですけれども、少なくとも前期を迎えたわずか半年しかいなかった学生さんたちは、まさに泣き泣き帰っていきましました、もっといたいよと言いながら。私は、戻っておいでねと言って千歳から送り出したのです。でも、送り出した後で何を感じたかということ、感謝です。たった半年で、私たちのふるさとを愛する気持ちを持ってくれたのだな、本当にありがとうございますという気持ちでした。

実を申しますと、私は今、20歳の娘と17歳の息子を育てているのですけれども、下の子は道産子です。つまり、この子を産む前の年に私は札幌市民になりました。しかし、札幌を好きになるまでにかかり時間がかかりまして、道産子を産んだのですけれども、産んだのは実家です。実は逃げ帰ったのです。恥ずかしい話、私は群馬県というところに生まれ育っておりまして、親戚のいないところで暮らしたことがないのです。北海道という地に来たときに、知り合い、友人、もちろん恩師、全くおりません、同僚もおりません、親戚もおりませんという状態の中で生活をスタートしたときに、自分がどこに流れていくのかわからない、どこともつながっていない、非常に不安な状態で妊娠し、出産し、子育てがスタートしてしまいました。

私は、札幌が余り好きではありませんでした。隣の人に何かを持っていっても、半返しをしてくれないのです。私たちのところは、当たり前にしてくれました。そうやって半分返すことによって、隣の縁が次の日にへと持ち越されていくのですよね。ところが、例えば何かもらったものを持っていくと、翌日にもっと価値のあるものが返ってきて、それで終わりなのです。北海道って、群馬とは全然違うのだ、義理も人情もないのだと思い、私は大変追い詰められていきました。

あることがきっかけで、すごく変わりました。今はもちろん札幌が好きです。何がきっかけだったかと申しますと、読んでいた本の作者が、その日の新聞で講演に来ているというのを見たのです。当日行っても大丈夫なのかなと思って行ったら、入れるのです。そんなに人が集まらない。先ほどと逆なことですが、いいですよ、当日でもということになりました。

ある新聞の紙面に感動いたしました。この人と話してみたいと思いました。まさかねと思いながら新聞社に電話をしたら、本人が出て、「じゃ、今日、午後、一緒に食事しない？」って言われたのです。驚きました。つまり、自分の地元でも、あるいは新婚家庭をくんだ東京でも横浜でも、よきことやよきものやよき人に会おうかと思ったら、それは大変な道のりです。そして、自分に同じようなものを与える力がなかったら、その人たちは会ってはいけません。ただのファンになんて会ってくれないのです。ところが、札幌は違ったのです。自分が求めたい、会いたい、欲しいと思ったら、そこまでの距離がものすごく絶妙なのです、このまちのサイズが。それで私は、それまでごく普通の専業主婦だったのですが、その絶妙な距離感を使って、自分にとって必要な情報、必要な人物、必要な場というものに、自分からアクセスする勇気というのをこのまちでもらったのです。その結果、専業主婦を6年やった後で、今の大学に40歳で就職することができました。

だから、人へ、いいものへ、自分を駆り立てる力がこのまちにはあります。非常に抽象的な言い方ではあるのですが、先ほど、市民自治に向かって公的な視点、ネットワークの自分が中心にいるのだという意識を持ったときに、幾らでもそれをつくることのできるまちなのだというのが私にとって最大の魅力です。

それから、私はずっと、道の男女平等参画審議会というところの会長をやっていたので

すね。今、この単語はかなりバックラッシュに遭っておりまして、例えば首相等が、どんな単語でこれを表現するかということ、ワークライフバランスと呼ぶようになっていきます。それはどういうことかということ、仕事と私生活、家庭といったもの、地域といったものの調和という意味なのですね。経済格差も広がっている、健康格差も広がっている、いろいろな格差も広がっているのですが、実はこのワークライフ、つまり仕事と家庭、地域生活との調和の格差もかなり広がっているのです。そういったことの調和に対しての支援をしてくれる地域にいるかないかによって、この格差は決定的になってしまうのですね。そう考えたときに、札幌市というのは、働くこと、それを見つけること、産むこと、子供を育てること、自分さえそれにアクセスしようとするれば、あるいは癒されること、治療すること、それから見送られること、捧まれること、こういった一生におけるさまざまなイベントをするチャンスにあふれている場所なのだろうと思うのです。

ただ、問題は、先ほども言いましたように、それをひとり占めしていいのかという問題だと思うのです。例えば私は、今、学校である研究をしています。それは、ふるさとインターンシップという研究なのです。多分、日本でそんなことをやっているのはうちの大学だけではないかと思うのですが、それはどういうことかということ、学生を預かるというのは、4年間だけ学びの場を提供するということですね。だからといって、札幌にある私たちの大学が、学生を預かった、そしてその後、彼らを市民にしていく義務は私たちにはありません。むしろ私たちがやらなければならないのは、返す力ではないか考えたのです。それで、ふるさとインターンシップというのを実施し始めました。3年ぐらい前からです。

どうするかということ、とても簡単で、その学生さんの出身の市町村の市役所、あるいは県庁に、夏休みや冬休みの期間、地元に戻ったときにインターンシップで預かっていただくということなのです。私は、この後すぐ東北に行き、その後、鹿児島、沖縄に行きます。なぜなら、学生がそこでインターンシップをしているのです。それで視察に行くのですよね。何か困っていることはないか、あるいは、行政に御迷惑をかけていないかということをチェックしながら、残りのインターンシップの時間が、いい課題に出会えるようにと指導していきます。これは、返す力なのですよね。

つまり、札幌市がよりよいまちづくりをしようかと考えたときに、このまちには魅力があふれています。これはもう、私たちが言うまでもなく、皆さんもよく知っている。そしてそれは、人生のすべてにかかわるさまざまなチャンスや力にあふれている。しかし、これを独占しようと思うと、それは枯渇してしまうのです。むしろ、ここで学んだ人を地元に戻す。ここで働き盛りときに働いた人を、また老後は地元に戻す。あるいは、地元の役に立った人が、最後の老いをこのまちで過ごさせるといったような、そういった返す力というもの、とてもまちづくりには必要ではないのかなというふうに思います。

ぜひ札幌市も、インターンシップというものをもう少しやっていただけたらと思うのです。確かに、市長さんが言いましたように、広報も来ます。メディアを使って私たちは、札幌市の市役所が何をやっているのかよく知っていますよね。でも、このニュースを後で聞く人と今ここに居る人とでは、得られた情報が全然違います。それは暗黙知といいまして、言葉や文字で書かれたもの以外の、例えば私たちの体温だとか、私たちの表情を見る、現場にいることによって皆さんが得られるものは、後で文字で読むものよりも何倍ものものがあるのですね。そう考えたときに、窓口の対応がすばらしくなった、でも、やはりそれはバリアの向こうからの発信です。そのバリアを低くしていくところで行政は語らなければならないと思うのなら、せつかく教育基本法も変わったことですので、小中高すべての生徒さんたち、学生さんたちに、365日のうち1日か2日でもいいから札幌市役所を経験させる日をつくっていただく。

また、学びというのは、学生だけの特権ではありません。私たち社会人だって行政にインターンシップに行ってみたいですよね。これから公務員になるのは無理だとしても、1週間でも3日でもいいから、公務員ってどんなものなのかを市民に経験させてくれる市民インターンシップのようなものがあったらどんなにいいだろうかと思います。

また、先ほどの逆、ふるさとインターンシップ、札幌から東京へ、あるいは札幌から北見へと学び、働きに出ている人たちに、札幌市役所がふるさとインターンシップを引き受けますというようなことを発信し、改めて市民としての自覚といったもののチャンスを広げていただければなというふうに思います。

林美香子氏 ありがとうございます。ぜひそれは何か、実現してほしいなというふうに、今お話を聞きながら思いました。

林先生と違って、私はまた、札幌生まれ札幌育ちで、ずっと札幌で、札幌以外に暮らしたことがないのです。ずっと札幌しか知らないのですけれども、札幌はすばらしいまちだと独断的に思っております。どこが魅力かなという、やっぱり自然と、そして都市機能の調和というのが魅力だなと思うのです。本当に中心部にいると、都会という感じですよ。でも、ここから車で30分もすると、山や緑があって、本当にこんなまちはほかにないのではないかと自慢をしています。

また、大都市だけれども大き過ぎないというところが、私はワークライフバランスにはとてもいいのではないかと考えているのです。私自身は、2人の息子を育てながらずっと働く母なのですけれども、それが実現できたのは、多分、通勤時間の問題ですとか、保育の問題とか、いろいろな形で、札幌だったから可能だったのではないかなというふうに思っています。これは大きな魅力だなと思います。

また、札幌が世界に誇れるもの、たくさんありますけれども、例えばPMF、パシフィック・ミュージック・フェスティバルやコンサートホールKitara、そしてモエレ沼公園、今年から始まったサッポロシティジャズ、こうしたすばらしい文化資源があるわけですね。この国際的にも注目されるすばらしい文化資源を、私たち札幌市民自身がその価値に気づいて、誇りと思って、そして、より一層の情報発信とその活用を考えていくべきだなと思います。これからのまちづくりの要になると思います。観光に限らず、経済的な効果、あるいは雇用の増加ということにもつながると思うのです。

こうしたまちづくりというのは、その年その年の目先のことだけではなく、やはり長期的な視点のまちづくりというのがとても重要だと思います。その点では、市民も頑張りまされども、地域経営のトップである市長さんにぜひ、すばらしいリーダーシップをとっていただきたいなという期待をしております。

今回、こうしたまちづくりトークに参加するに当たって、新しいまちづくりプラン、今日、皆さんのところにも封筒の中に入っていますが、それをいろいろ読んでみましたら、例えば「環境首都・札幌」という宣言をしています。これは、これからの時代にもものすごく大切なことだと思うのですが、でも、それを本当に世界に向けて発信するためには、相当な、大がかりな計画が必要だと思うのです。欧米都市のような都市計画とか交通計画のような、本当に腰を据えた大がかりな計画が必要だと思います。実際に、アメリカのポートランドですとかフランスのリヨン、グルノーブルなどに行ってみると、中心部への車の乗り入れの禁止とか公共交通の充実、さらに、乗り捨て自由な自転車がまちの至るところにあるなど、本当に環境への配慮というのがすばらしいのです。そういうことを私はやっぱり札幌でもぜひ実現してほしいなと思います。これは、行政だけではもちろんだめで、多くの市民の参加も必要だなと思います。

また、まちづくりに加わっていて思うことですが、従来のような縦割りの発想では非常に難しいなということをおもいます。もっと横断的な組織づくりが必要で、そこには、本当に横断的な行政の参加、そして専門家や市民の参加も必要だなと思います。

またちょっとモエレ沼公園の話させていただこうと思うのですが、今回、こうした若い人向けの「BRUTUS」という雑誌でもすばらしい紹介がされているのですけれども、ここは、ごみの埋立地がこうしたすばらしい公園になったところですね。そういう意味では、環境首都・札幌のシンボルになる公園だと思います。

その活用を考えていくと、例えば環境的な視点、公園管理、緑地であること、文化的資産であること、観光のかなめであること、そして教育的な働きというふうに、非常に複合

的な分野があると思います。その文化的な価値を世界に発信していくということを考えますと、モエレ沼公園の中にイサム・ノグチのギャラリーがあるのですが、もっと充実させたいなということを思います。イサム・ノグチが札幌に来たのが1988年なのですね。ということは、来年、その20周年なわけですよ。来年ぜひ、何かイサム・ノグチギャラリーの充実だとか、イサム・ノグチとモエレ沼公園といった、本当に世界規模のフォーラムなどを開催してもらえたらいいなと思って、今日、この封筒に入っているいろいろなものを見ていたら、モエレの文字は一文字もなく、私は今日、帰ったらすぐにこのピンクのはがきに書こうと思ったのですけれども、そういうふうに、やっぱり市民の中から提案していくということも大切なのかなと思います。

またさらに、今、私は札幌市の仕事のお手伝いとして、札幌スタイルという、デザインによるまちづくりの委員会にも加わっていますが、これは経済部局だけで成功するものではないと思います。もちろん、経済、産業に大きな力を発揮すると思いますが、それは文化にも、観光にも、教育にも、そして、暮らしそのものにも非常に大きな影響があると思うのです。こういうふうにもっともっと大きな運動になるものだと思いますので、そういったこともぜひ横断的な組織で、札幌のまちづくりの中心にしてほしいなという願いを持っています。そこには絶対に市民の参加がなければうまくいかないだろうなということも思っております。

というふうにまた、市民3人がいろいろなお話をさせていただいたのですけれども、市長の上田さん、いかがでしょうか。

上田市長 ありがとうございます。モエレ沼、先ほどから何回か出てまいりますけれども、これは、モエレ沼公園の成り立ちからいって、市民参加の、札幌市民がつくった公園なのだというふうに言えると思います。なぜならば、一人一人が出したごみがそこに詰まっているからであります。そういう意味で、あそこは市民がつくった公園なのだというふうに、無理が多少ありますけれども、私は市民参加によってでき上がった公園なのだ、だから大事にしていこうというふうに思ったりもしております。そこにイサム・ノグチが、あの壮大なスケールのランドデザインをしていただいた、そういう目のつけどころといえますか、ああいうところをですね、やはりさすが20世紀を代表する彫刻家であり芸術家であったのだなと、こんなふうに私は思っております。

レナード・バーンスタインとイサム・ノグチという、20世紀を代表する2人の芸術家が、札幌に、まさに遺産を残してくれた。PMFという音楽祭と、そしてモエレ沼というのが、この20年の間に、本当にすばらしいものを、世界に発信できるものを残していただいたと。これも、まさに海老名先生がおっしゃるように、国際的なのですよ。日本人ではなくてね。外国の人に札幌を盛り上げていただけ、そういうすばらしい、札幌も、昔から言えばクラーク先生だとか、いろいろな方々が外国の英知を我々に与えていただいて、このまちをつくってきたというのがあります。それが、この芸術文化という面でも、20世紀のもう最終ラウンドで、そういう方々のお世話になりながら、札幌が世界に発信できる、まさに活性化してきたというものをつくることができたのだなというふうに、感動的にお話をそれぞれお聞きしていたところであります。

そして、林先生のお話で、私、とてもそうだなというふうに思って、私も同じように考えているところがありますので少し申し上げたいと思いますが、ふるさとインターンシップだとか、ああいうのは、今、私、2年目ぐらいから、まちづくりセンター等における活動の非常に重要なテーマとして、各区にある大学とまちづくりということをきちっと大学に呼びかけようという活動をさせていただいております。学生をどうやってまちづくりの中に引き込むかと言ったらちょっと変な言い方になりますが、お手伝いしていただく、あるいは参加をしていただくということ呼びかけていこうということなのです。

それは、札幌にせっきおいでになっている、大学に勉強したいということでおいでになっている人たちを、単に札幌の大学のキャンパスの中で勉強するだけではなくて、そのフィールドを札幌全体で、このまちで学んでほしいと。このまちで学んだことを社会的な

力に変えていただく、そういうことができないだろうかということを考えて、各大学にアプローチしていこうということで、学生さんに地域の中で、まちづくりの一端を担っていただくというテーマを提供していこうということを始めました。もう今、大体すべての大学と関係を持ってやっておりますけれども、この人たちが札幌で学んだことを、本当に、返す力とおっしゃいましたけれども、ふるさとに帰る場合もあるでしょうし、あるいはどこかの、就職を求めて違うまちで活動される方もおられるでしょうし、そういう方々がまちづくりなり地域活動のおもしろさ、楽しさ、自己表現する方法、こういったものを身につけていただくことによって、私は、札幌がいろいろな意味で貢献ができるということになるだろうと。そしてまた、自分たちのまちづくりの新しい感覚、感性といったものも、あるいは、マンパワーとしての学生の力といったものも借りることができる。お互いにいいことができるのではないかなというようなことを考えてやったところであります。

最近、北海道大学の学生がお祭りを手伝ってくれたり、そういうのもありますし、林先生の国際大学の学生さんがパソコンの指導をしていただけたというようなことも、本当に熱心にやっていただいて、インターネットの使い方とか、今の学生さんは得意ですから、そういったことで社会貢献していただいているのですね。そういうことで、自分の能力を十分に使って社会に関係づけていくというふうなことで、まちづくりに参加をしていただくということを今やっているところであります。

そして、私は、先生のお話の中で、北海道全体を見渡してと、私も一番最初に申し上げましたけれども、札幌が持つ役割をどう認識して、そのことを実践していくかということについて、やはり具体的に何かやろうということで、今まで収穫祭をやっておりまして、9月の下旬に、各地の産物を大通公園で、リンケージプラザというふうに行っているのですね。そして、まちの方が出てきていただいて、産物を持ってきて、そこでみんなで、札幌市民がいろいろ購入したりすることができる。これを、私はもうちょっと恒常的なものにできないだろうか。札幌のまちに、そういうアンテナショップといいますか、そういうような形で、ものを売るということと、自分たちのまちの特色を情報発信するという両方の機能を持ったスペースをつくっていきなというふうに思っております。それが多分、札幌の、各市町村との連携を深めていく非常に大きなチャンスになるのではないかなというふうに思っております。

そして、もっと言いますと、ふるさとインターンシップというふうにおっしゃいましたけれども、札幌には全道から、各市町村からたくさんの方が出てきておられます。そういう人たちが自分のまちのお店の店番をできないだろうか。そういう人々が集まる場所をそのお店に、機能させるといいますか、役割を持つことができるなら、すてきなというふうに私は思って、今、職員と一緒に、いろいろなアンケートをとって、各市町村で、どうですか、こういうことをやりたいのですけれども興味がありますかというふうなアンケートをとりましたら、大体65%ぐらいのまちの方々が、おもしろそうだ、条件によってはやってみてもいいなというようなことを答えていただいているところであります。

私は、いろいろないい場所をつくって、そして、運営するのにいろいろな困難もあると思いますけれども、ふるさとの方々がふるさとを大事にしたいという気持ちをこの札幌で実現できるような、そんな場所づくりをすることによって、札幌の経済というものも結構おもしろい展開ができるのではないかな。東京ばかり見るのではなくて、地元ですね、そういう、北海道を活性化させる、そういうものにつなげていく、一つの考え方として、それだけでできるというわけではありませんが、一つの発想としてできるのではないかと、そんなことを今思っているところであります。

海老名先生の御指摘の、諸外国との関係の、貿易とかということですね、これも私も、今、中国だとか、瀋陽市と姉妹都市であったり、ロシアのユジノサハリンスクあたりといろいろな交渉をしたりというようなことも少しずつ展開をしつつあるところであります。韓国、中国、ロシア、本当に札幌というのは近い距離にありますので、その地の利を、小樽港であったり石狩湾新港だったり、そういうところを本当にうまく展開、つくることに

よって、北海道の、例えば食の文化を、これをしっかりと加工をして、そして食してもらおう。安全で、そして、最近ちょっと食の安全が問題になっていきますけれども、本当にいいものを食べていただく、そういうことに札幌が活用できるといいますか、加工業ですね、そういったものをしっかりやってつけることができれば、私は、北海道に役に立つ札幌というふうな点でこれからの札幌はやっていけないのではないかなと、こんなふうに思っているところでもあります。

林美香子氏 ありがとうございます。リンケージ・アップフェスティバルに関しては、最初は本当に札幌の近くの市町村が中心だったのが、今はもう全道からさまざまなものが集まり、また市民も本当に楽しみにしていますし、またそこが観光の場所にもなっていくのだろうと思います。

この座談会、本当に残された時間が短くなってしまったのですがけれども、先ほど先生がおっしゃっていた国際都市のことで少し、具体的なアイデアなどがあれば海老名先生にちょっと伺いたいなと思ったのですが、単に観光ではなく、企業の誘致を含めて、外国人の人たちが住むことで札幌の経済はもっと豊かになるのではないかというお話があったのですが、ちょっと限られた時間で申しわけないのですが、お願いいたします。

海老名氏 今、市長が、大学における教育のところをちょっとお話しされたのですがけれども、本当にもったいない、つまり、北海道にある大学を子供たちが卒業して、北海道でとどまって就職をしている割合、残念ながら、今年の北海道経済白書を見ると、44%が道外に就職してしまった。34年間も逃げていた私が言えた義理ではありませんけれども、やっぱり、子供たち、せっかくここで教育を受けて、できればここに就職の機会を得たかったのだと思うのですね。でも、それが十分でない。これは、毎年毎年起こっていることですから、100人の子供たちが卒業したら、40人は道外に就職を求めざるを得ないという言い方もできるわけです。

ですから、そのためにはやっぱり、例えば最近、苫東の方にトヨタ系のデンソーとかが来て、数千人の雇用が生まれ始めています。あの子供たちというか、就職できる人たちは、その機会がなければ本州に行かなければいけなかったかもしれない。やっぱり、経済というのは、そこに企業が立地して、そこで雇用の機会が生まれて、それを取り巻く森羅万象でいろいろなお金が動くということです。だから、北海道に外国の企業を誘致する仕掛けというものは、よく特区とか言われてもうまくいかない。これは、日本人の間での不公平だからなのです。条例を改正したり、省令を改正したり、いろいろな手続が必要ですがけれども、外国の企業に、例えば最初の3年間、免税の措置を特典として与えますとか、必要な雇用は市が率先していい労働力を確保して提供しますよとか、さまざまなやり方があります。そういう、とても良質な労働力が低廉に得られるということになると、必ず企業は進出してくれます。

ですから、やっぱり、お願いしたいのは、せっかく卒業していく有能な子供たちを、ぜひ北海道で就職して、北海道の経済を元気にすると、そういうサイクルを回せるような仕掛けに向かって、みんなで知恵を絞っていききたいなと、こういうふうに思っています。

林美香子氏 ありがとうございます。

私も北海道の大学を出たときに、私は札幌で就職をすることができましたが、本当に大半の人は、本当はここで仕事をしたいけれどもということで本州の企業だったことをまた思い出し、今また子供たちも同じということでは、やっぱり私たち相当、市民も含めて頑張らないと、次の世代の子供たちへの経済ということもあるのだなと思います。

本当に時間が少ないのですがけれども、林先生、先ほどワークライフバランスの話がありましたけれども、私も働く母として、ワークライフバランスって、すごくこれからのキーワードになっていくと思うのですね。そのあたりで、もし林先生の方から、市民に、また行政に、企業に、お話ししたいことがあったら、一言お願いしたいのですがけれども。

林美枝子氏 そうですね、例えばワークライフバランスの支援を行政が行うということ考えたときに、ワークの支援って結構簡単、簡単と言っても何か失礼ですが、とても簡単なのです。ところが、ライフの支援というのは本当に難しいのです。なぜならば、例えば企業に所属しているとか、ある職域、職種でつかまえることができないですね、ライフの部分は。そこで多くのものを占めるのが、やはりこういった文化活動だったり、あるいは学びの場の充実、しかも、その学びの場を生涯学習社会の中で学べる場にしておくという支援がとても重要だと思うのです。あるいは、子育てだとか老いだとかということとのバランスのとり方もライフの中に入っていくのですが、とにかくやはり行政って、納税者に目が向いてしまう。しかし、その納税者の隣には専業主婦がいたり、お子さんがいたり、高齢の方がいたりして、その人たちのライフをいかに支援するのかというのがものすごく難しいし、細かいところに対応していく、そして、多くの年齢も性も違う人たちが何を望んでいるのかを、いつも聞き耳を立てていなければならないという意味では、対応を細かくしていかなければならない難しさはあると思うのですよね。

林美香子氏 そういう意味では、今日お集まりの皆さんたち、ぜひ、こうした意見募集の紙も入っておりますし、またメールでも寄せられるようになっておりますので、皆さんの考えるまちづくりで大切なものということをどんどん、私たちの側から情報発信していくことも必要なのかなと思います。

この座談会、限られた時間でしたが、今出たお話を少しまとめてみようと思うのですが、札幌にはさまざまな自然環境や文化、町並み、都市機能などの魅力や資源がある。そして、今後のまちづくりでは、そういった札幌の魅力や資源を十分に生かすことが必要である。また、札幌には道都としての役割もあるので、周辺の市町村との連携も重要である。また同時に、国際都市になるための仕掛けも必要であるということ。そして、まちづくりにおいては、従来の縦割り組織的な発想ではなく、横断的な組織づくりが必要であり、また、広範囲な専門家や市民の参加も必要であること。そして、市民一人一人が、関心のある事柄に対して積極的に働きかけていくことによって、多くの市民のアイデアとか行動が集約されて、札幌のまちづくり、そして魅力向上の大きな力になっていくのだろうと思います。

ぜひ皆さんたちにさまざまな御意見を寄せていただきたいなと思います。

4 来場の方々からの質問・意見に基づく座談者によるフリートーク

林美香子氏 それでは、この後の時間は、会場の皆さんからの御質問や御意見に、この4人が答える形で進めていきたいと思えます。

質問用紙にお書きになった方、スタッフが参りますので、どうぞお渡しくださいませ。

では、どうぞお願いいたします。

そして、すべての御質問、御意見を取り上げるというわけにはいきません、申しわけございません。でも、これは必ず市の方にお渡しいたしますので、お書きくださいませ。

では最初に、先ほど回収したのものの中からピックアップして取り上げていきたいと思えます。ほかにも実はたくさんいただいているのですが、事務局の方で選んだものが今こちらに参りました。上から順番に、一応優先順位がついているようなのですけれども、たくさんのお質問に答えていただきたいので、手短かに答えていけたらと思えます。

質問・御意見で、まちづくり活動を特別な人の活動ではなく、みんなの活動にしていくためにはどんなことが必要だと思いますか、アイデアを聞かせてくださいということで、林先生、いかがですか。

林美枝子氏 先ほども少し言ったのですけれども、自分が育ったところって、自分が進み出なくても、親戚だとかですね、実はさまざまな村の、何というか、集合体の情報経路というのがございまして、家の単位で考えると、情報貧乏にはならないのですね。お誘いが自然に来るものですから、自分が出ていっていいところに出ていけばいいというような状況だったのです。札幌に来て感じたのは、自分がまずアクセスしないとだめなのということ。情報はあっちゃからは、必ずしも自分にとって必要なものは来ないのということ。だから、すべての人たちが、まず最初の一步は自分で踏み出すという自助力という、その勇気というのか、それが必要ではないかなというふうに思えます。

林美香子氏 先ほど「広報さっぽろ」の話を上田市長さんも詳しく紹介していただきましたが、例えばこういうものをよく読んでいる人って、自然に、ここに行ってみようとか、ここで意見を求めているのだということがわかりますよね。そういう意味では、難しいことと思わず、ちょっと参加してみることで、まちづくり活動というのは広がっていくような気がするのですけれども、海老名先生からは、まちづくり活動を広げていくためのアイデア、何かありますか。

海老名氏 やっぱり、義務とか、言われてとか、そういうことではだめだと思うのですね。参画していること自体が楽しくなるような仕掛けというもの、それは、きっともしかすると札幌でも区によって事情が違つかもしれません。ちょうどマンションの理事会なんかでいろいろなことを決めて、お当番がどうで、お掃除をした人は肩たたき券が当たるとか、いろいろな仕掛けとか、何かいろいろなことを考えていますね。でも、それはやっぱりその自治体とか区で、みんなが楽しく参画できるということをベースに考えないと、絶対長続きできないと思うので、少し、みんながやりたいな、やったら楽しいな、得だなと思えるような仕掛けを考えることだと思いますね。

林美香子氏 そうですね。そして、自分にとっても興味のあること、好きなことから始めるというのがまちづくり活動の一步としてはいいのではないかと思います。

私は、子供が小さいときには、読み聞かせのグループをつくって、そこからまちづくり活動を始めていきました。あるとき、コンサドーレ札幌を札幌に呼ぼうというか、つくろうというグループと知り合って、そのときは本当に楽しい活動で、もう、燃えてという感じでやったのですけれども、御自分の好きなところから始めていくということも重要なかなと思えます。

続いての方です。子供を産んでも、育てていくのが大変です。勤務先に育児休業の制度

がないか、あっても現実にはとれない状況があります。そんな理由でためらいます。その後の預けるところも難しい。女性でも男性でも、どんなところに務めていても、自営でも、子供を産んで育てる期間は社会全体でサポートするような環境である、そんな札幌のまちになるといいなと思っていますということで、でも、このあたりは私は、出産したのが二十数年前だったのですけれども、そのときに比べると、ものすごく事情はよくなっているなということを思います。例えば、夜間保育の保育所も札幌市には何力所かあって、これは、ほかの政令指定都市に比べるとすごく充実しているところなのですね。このあたりでは、林美枝子先生からはどうですか。

林美枝子氏 子育て支援という発想で、ものをいつも考えてしまうのですが、実は以前、札幌市のワークショップのメンバーに入れていただきましたときに、その視点を変えてほしいということを提言いたしました。では、どうやって変えるのかといったならば、子育て、つまり、親の手を支援するという姿勢から、子育て支援ですね、つまり、子が自分で育つ力を支援してあげるといった視点がものすごく重要だろうと思うのです。もちろん、それは乳幼児に対しては、子育て支援というのはちょっと難しいかもしれませんが、少しでも自分で自助努力をし、自立していった子供たちに対しては、市は親の手経路ではなく、直接、子供の育ちを支援するような視点というのがとても重要だし、何で私が追い詰められたかということ、ひとりだって思ったからなのです。私の手しか当てにできないのだと思ったときに追い詰められました。

ところが、隣に札幌市がいてくれる、道がいてくれる、清田区がいてくれる、近所がいてくれるとなると、たとえ、ある特定の個人がすぐ助けに来てくれなくても、気は楽のような気がするのです。ところが、それを、残念ながら20年前は感じることはできなかった。それで、そのワークショップで提言したのは、大した金額ではないので、例えば子供のお誕生日に何かください、絵本1冊でいいです。市から、道から、そういうものが送られてくるだけで、多分、私は、この子を育てているのは私1人ではないのだ、地域も育ててくれているのだから、きっと思えたと思うのです。だから、親の手経路しか国も道も市も考えていませんが、子供たちは自分で育つ力があります。そこにダイレクトに支援すれば、子育て支援をすれば、子供たちは必ずここが自分を育ててくれたと思えるのではないかと思いますし、そういう分散ですね、分散が逆に親を楽にしてくれるような気がするのです。市のかわりに、道のかわりに、国のかわりに私が育てているみたいな意識が私を追い詰めましたので、そういう意味では、いいのよ、肩の力を抜いて、ちゃんと隣に行政もいるし、地域住民もいるのだからというのを直接子供にお知らせしてくれることで、親も許されていくのではないかなという気がいたします。

林美香子氏 また今、NPOなどで、こうした子育て支援をメインにしたグループも非常に増えてきていますよね。それは本当に20年前とは全然違う世の中だなということを思います。このあたりはぜひ、市長さんにも一言お願いしたいと思います。

上田市長 非常に難しい問題で、少子社会を深刻に考え、そして、親御さんの負担といたったものをどう軽減していくかというようなことも非常に課題としてあり、特に働く女性の皆さん方に、両立支援という言い方をしておりますけれども、まさにこれもワークライフバランスということでもあるわけでありまして、各企業がどういう努力を、そのことに問題意識をちゃんと持ってもらうようにしていくということが非常に重要でありますし、また、保育所の整備というのは、いつも需要と供給が追いつきをしておりまして、待機児童ゼロというのはなかなか実現できないというのが現実であります。でも、それはしっかり、永久の課題でもあるわけでありまして、ゼロに向けて努力をしていくというふうな形でやるということ。

それから、家庭で育てておられる方々に対しては、子育てに対する私たちの、いろいろな、地域の方々がそういう支援をするチャンスをつくるような場所をつくっていくという

ことで、今、さまざまな場面で、子育ての支援をするグループをつくっていくというようなことでやっております。今日も、ちょうど市役所の本庁の1階のところで、子供たちがたくさん、連れてきていただいたお母さん方が交流をするということでやっておりましたけれども、私も参加をさせていただいて、子供たちとお母さん方の接触というか、そして大人同士がそこで顔を合わせて、いろいろな悩み事だったり、あるいは心配事を気軽に話し合うことができるような、そんな場所をつくろうということで、今、子育てサロンという形でやろうとしております。

こういったものを、社会全体がそういう子育てに対する支援をしていくという枠組みというか、方向をつくっていくということが、今、林先生がおっしゃっているような、私以外にもみんなで作っていくのだというふうな、私だけではないよというですね、そんな機運をつくっていくことが行政の仕事ではなからうかということで、今努力をさせていただいているということでもあります。

林美香子氏 ありがとうございます。

実はすごくたくさんの御質問や御意見が寄せられておまして、海老名先生への御質問です。市民の民度を高めることが必要と話されていましたが、どういう仕掛けがあれば市民はそのように行動するのでしょうか。海外やほかの都市の事例でもよいので紹介してほしいということです。

海老名氏 日本は民主主義と言われながら、非常に、無責任とか、他人に押しつけるとか、そういうことが平気で行われている国だという言い方もできるというか、せざるを得ないと思うことが多いですね。やはり、民度という意味では、だれに強制されたわけでもないけれども、自分が立っている立ち位置の範囲においては、自分の責任でそこを清潔に、安全に保っていくのだと。ところが、日本人というのは、何か事が起こると、公が悪いとか、政府が悪いとか、制度が悪いとか、そういうふうになんか責任を押しつけるということがとても気になる。

だから、やっぱり、先ほど教養とか、ちょっと生意気な言い方をしましたけれども、大人になって自分たちが他人に迷惑をかけないで生きていく、その範囲では、どんなに楽しくわがままに暮らしても、それは構わないけれども、でも、社会にはやっぱりルールというものがあるから、この、すごい、何百万という人たちが平和に暮らしていくためには、一人一人がお互いのところにそういう被害を与えないということは当然の社会のルール。それが守られるというのが民度の高い国だし、それが無視されて、暴力が振るわれるのが、まだまだ低い国だということになるのだらうと思うのですね。

ですから、やっぱり、自分たちが24時間、毎日毎日暮らしていく中においては、自分で責任をとって生きているという部分は自分で完結してもらいたいと、そういうことです。

林美香子氏 ありがとうございます。

それから、やはり若い人たちの職場確保が進まなければまちづくりも進みません。若い人たちが安心して働くことができることで、結婚、出産にもつながり、よいまちづくりにつながると思いますという御意見が寄せられております。このあたりは上田市長さん、ぜひ経済面での頑張りも、よろしく願いいたします。

本当にこれは市民も、そして企業も一体となった、経済活性化というのでしょうか、そういうことが必要でしょうね。

上田市長 そうですね。やっぱり、どうやったら企業がこのまちで産業を担う、そういう投資をしようかという投資の意欲を引き出すのは、やっぱりまちの魅力だと私は思います。ですから、このまちに投資をして、仕事ができるという、そういう見通しを立てることができるような魅力を私たちはつくっていくために、間接的でありますけれど

も、そういう仕事を一生懸命行政がやらなければいけない、それがまちづくりだというふうに私は思っているのですが、ちょっと迂遠のような感じもしますが、実はそこがしっかりしていると、しっかりした企業が生まれ、そして発展できる可能性が出てくるだろうと、こんなふうに思っています。

林美香子氏 ありがとうございます。

続いての御意見ですが、市民参加の具体化に期待しています。長寿、長命の社会で、高齢者の時間の余裕があります。新鮮で魅力を感じ、容易に参加できる機会を創造してくださいという御意見ですが、このあたりは林美枝子先生がおっしゃっていた、生涯学習とまちづくりがうまくつながっていくといいですね。

林美枝子氏 はい。あとはやはり、私は医療人類学という分野の人間なので、医学なのですけれども、すごく重要なことは、若いとか年老いているというのは、実は身体的な問題ではないということだと思っております。極めて文化的な問題であるというふうに考えていて、例えば65歳以上の方が人口の何十%にもなってしまうのだみたいな言葉って、実を言うと、とてもいいかげんな話ですよ。ある大学の先生は、高齢人口を年齢ではかるのはおかしい、むしろ、人口の上から14%を高齢者と呼べばいいのではないかと。100歳の方が一番上ならば、そこから数えて14%までが高齢で、それ以下の人は退職もなく、働き続け、自己実現ができるように、だって、10人に1人だけが介護を受けるのであって、残りの9人は、実を言うと死ぬまで元気なわけですから、そういったものを生かすためには、老いるという概念をもう少し変えていくのが重要なのではないかとというようなことを言っていました。

それとともに、自助的な力をつけていく子供を、やはり、一人前の大人扱いしていくという視点も同時に必要かなという気がいたします。一人前の幅をものすごく豊かにするということが重要な気がします。

林美香子氏 ありがとうございます。

続いて、災害に強い安全なまちの整備には、市民自らの活動が重要です。そこで、自助・共助能力を高める具体的な政策を豊富に打ち出してください。例えば自助・共助コンクールを定期的開催し、防災意識の高揚を図ることも効果的だと考えますという御意見なのですが、例えば、海老名先生、ニューヨークは随分荒れた地域もあったけれども、例えば緑をふやすことでまちが安全になったり、あるいは公園の使い方をすごく上手にすることで人々の心が豊かになって、まちも安全になったというような話がありますよね。そのあたりは、例えばニューヨークにいらしたときに感じることはありましたか。

海老名氏 ニューヨークというのは、世界でも最も危険なまちと言われた時期があります。私が赴任したのは、もう35年も前ですけども、当時は非常に危なかったですね。ところが、まさに上田市長のような、当時の市長がクリーンアップ作戦というのを宣告したのです。一切の、まちにとって好ましくないもの、これを市庁舎の上から見える範囲は全部だめと言ったのです。

それで、私はよく、アジアも見て思うのですけれども、やらなければいけないことというのは、余り民主的に多数決でとかですね、協議してとか、そういうことではない。非民主的と思えるようなことであっても、正しいということは強権を発動してもやらなければだめだと。ニューヨークの場合は、実は当時の市長がクリーンアップ作戦をやった後、非常に安全なまちに変わりました。私が勤務して居住していたころは、地下鉄に夜乗るといのは、おまえが悪い、殺されても、それはおまえが悪い。今は、皆さんが行っても、女性でも、夜も乗れる。こういうまちに変わることができるのです。

ですから、これはやっぱり、そういった、安全に疑義があるという地域があるとすれば、それは、市長が強大なやっぱり権力をもってそれを排除するということが、ある場合

には必要なのだということを我々に教えてくれているのだと思います。

林美香子氏 ありがとうございます。

残された時間、限られていますので、御意見だけ、ここで御紹介をしたいと思います。

市民の手も借りて、温暖化防止を少しでも早く食いとめる必要がある。ビルの中に緑の道があると、そこには涼しい風が吹き抜けるようになるからということで、これはもう、都市計画にも温暖化防止の策は本当に必要だと思います。

続いて、札幌市は、健常者と障害者が手と手をつなぎ合った、日本一愛のあふれた温かい市であってほしい。そのためには、まだまだ改善されなければならない問題点がたくさんたくさんあるので、政治家に変えてもらうのではなく、一人一人ができることをやって、全国一のまち・札幌づくりを一緒にしていきませんかという考えが私の考えですという御意見です。

続いて、今年から開催したサッポロ・シティ・ジャズに関して意見があります。この催しは、短い札幌の夏を盛り上げる、とてもよいイベントだと思い、札幌の新たな魅力の一つになると思います。ただ、今回は初回であったせいなのか、市民への周知がやや足りないと感じました。テレビでの宣伝やポスターなどで、もう少し多くの市民の方に知ってもらえるようにすればよいと感じましたということで、このお祭りは私も、プロの演奏会にも行きましたし、また、札幌市資料館の裏庭で、アマチュアの皆さんたちがすばらしいコンサートを開いていて、まちを歩いているとジャズが聞こえてくるというのは、またすごく豊かな感じがしました。

続いての御意見です。林美枝子先生の発言、市民は公を担う主体であることを自覚するべきだという意見に共感しました。このまちのサイズが、自分の会いたい人に会える、必要な人、地、場にアクセスできる勇気をもらうことにつながったという意見に共感したという御意見です。

それから、重度の病気で離職した後の再就職がしやすいまちになってほしい。病気への偏見が強く、再就職がしづらい。行政のフォローが必要だと思うということです。

それから、札幌は、感覚的には北海道という国の首都であるように思います。北海道内の各役所の方々との連携を大切にしてほしいと思いますという御意見です。

このほかにもたくさんの御意見が届いているということで、この後また、市の方にお渡ししますので、時間が限られておりまして、すべてを御紹介することはできませんでしたが、すばらしい意見がたくさん寄せられて、何かうれしいですね、本当に。

では、本当に一言ずつ、今日の御感想を伺って終えたいと思いますが、海老名先生、お願いいたします。

海老名氏 今日は、皆さん本当にありがとうございました。私のような、非常に、34年間も離れておった者にこんなすばらしい機会を与えていただいて、私が今日、とても、いろいろと考えさせられた機会でした。

ただ、生意気を申し上げると、これほどすばらしいまちは世界にそんなにありません。私が長年さまよってきて、確信を持っています。このすばらしいまちを、さらにすばらしくしていくことは、我々の心がそう決めればできるというふうに強く感じていますので、またみんなで一緒に手を取り合って、もっとすばらしい札幌にしていければと思います。

今日はありがとうございました。（拍手）

林美香子氏 ありがとうございます。

では、林美枝子先生、お願いいたします。

林美枝子氏 私は、親として非常に幸福にさせていただきました札幌市に、でも、子供も幸福になってほしい、幸福な親になってほしいというのが最大の望みです。

子供は、大変ラッキーなことに、絵をかくのが大好きで、人と全く交わらないで、絵ばかりかいている子だったのです。札幌市立大学が、たまたま娘が大学に行くときにできて、入れていただきました。そのときに娘にはっきり言ったのは、市民であること入

学金は半額になりました。また、北大よりも授業料は安いのです。つまり、私が払っている、多分、税金よりも多くのものを娘は、教育投資を受ける体になっています。だから、もし本当にこの大学に進むのならば、それを将来、絶対札幌市に返せと言って入学させました。

あと、もう一つ、私は沖縄が調査地なのですが、沖縄のすごさというのは、お互いをすごく尊重することです、すべての人たちが。理由はとても簡単で、みんな神様の子供だからなのです。祖先崇拝をしております、亡くなった後、33回忌を迎えると、みんなニナイカナイというところに行き、祖霊というものに合祀されていくのです。だから、お互いが神の子で、将来一緒になる体なので、とてもお互いを大切にします。そういう仕掛けを、札幌市、私たちの市は持っていません、宗教的な意味ですね。でも、新たに同じような、お互いを大切にする、そういった気持ちというのはこれからつくってほしいのかなという気がいたします。

お互いに頑張りましょう、子供たちのために。(拍手)

林美香子氏 ありがとうございます。

では、上田さん、お願いいたします。

上田市長 どうも本当にありがとうございました。非常におもしろく、興味深く、先生方のお話もお伺いしました。

私は、北海道の中における札幌ということ、本当に私のテーマにしていきたいということで、先ほどもちょっと申し上げましたけれども、近隣の市町村と、まずは仲よくしていく、意思疎通をしっかりとしていくということで、この間、北広島、あるいは石狩市の市長さん、あした、新篠津村というところに行きまして、その村長さんと少しお話をさせていただくような機会をつくっているのです。近隣にたくさんの財産が、我々にとって大事にしなければならないものがたくさんあるということにしっかり気づいて、そして、札幌をどう活用していただけるかということ、そういう視点で隣のまちを見ていくといえますか、地域を見直していくということ、これからしていかなければならないというふうに思っているところです。

北海道は、すごい資源が豊かで、すごいんだぞというふうな話がたくさんございます。確かにそうだと思いますが、私の今の立場で申し上げますならば、北海道の最大の資源は札幌市だというふうに私は思っております。人がこれだけいて、そして、企業が7万1,000社、このまちにはあります。そこには、素晴らしい活力を持って、働こう、頑張ろうという人たちがたくさんいるわけです。そういう、人的にも、物的にも、あるいは富の集積というようなことからいっても、この札幌というまちは、北海道の中における、やはり最大の財産であると。これをどうやって北海道民全員、すべての市、町で過ごしておられる方々が有効に活用していくかということに、我々がもっとオープンな気持ちで、それを探し出していくということに少し視点を変えてやっていかなければならないのかなと。グローバル社会とって、世界と競争するのだというのも、これも一つ法則としてあるのかもわかりませんが、もっと身近なところに、自分たちが置かれている状況を私はしっかり見詰めて、やるべきこと、なすべきことを、私は、やっていくことの中に、新しいものを見つけていくことができるのではないかと、そんなことを思っているところであります。

今日、海老名先生、そして林先生からもお話をちょうだいしましたことを、一つ一つ、そんな視点から言いますと、すごく参考になる御意見がお聞きできたなど。もちろん、林美香子さんのお話も、文化的なもの、力の力といったものも十分感ずることができましたし、とてもうれしく思いました。

そして、シティジャズの話が先ほどございましたけれども、このような全体の社会状況の中で新しいフェスティバルがこのまちで生まれるという、このことを私は、札幌のパワーだというふうに思います。市民の皆さん方と一緒に、このまちづくりをしっかりやっ

ていく、エネルギーがたくさんあるのだということを何度も発見しながら、みんなと一緒に頑張っていきたいなと、こんなふうに思っているところでもあります。

ありがとうございました。（拍手）

林美香子氏 ありがとうございました。

そして、何より、今日寄せられた、このすばらしい意見の数々に私は感動しました。本当にみんなで力を合わせて、札幌のまちづくりをもっともっと進めていきたいなということをおもいました。

それと、今日お集まりになった皆さん、ぜひ、御家族とかお友達、御近所の方に、この話を伝えてほしいなということも思います。

何回もお話をしていますけれども、こうした意見募集が行われております。皆さんの意見を市に伝える貴重な機会になると思いますので、ぜひ、8月31日金曜日までということですので、たくさんの御意見をお寄せください。

札幌市では今、「さっぽろ元気ビジョン第2ステージ」の目標である、「市民の力みなぎる、文化と誇りあふれる街」の実現に向けたまちづくりプラン、「第2次札幌新まちづくり計画」の策定をしているところなのですね。ぜひ、たくさんのすばらしい御意見をお寄せいただきたいと思います。

本当に今日は、いい時間を皆さんと共有できてよかったなと思います。本当にありがとうございました。（拍手）

5 閉 会

司会 どうもありがとうございました。

座談者の皆様、大変貴重な御意見をいただきまして、まことにありがとうございました。最後に、座談者の皆様にもう一度、盛大な拍手をお願いを申し上げます。（拍手）

それでは、これもちまして、「さっぽろまちづくりトーク」を終了いたします。

本日は、御来場いただきまして、まことにありがとうございます。アンケート用紙を出口にて回収いたしますので、お書きになった方はスタッフの方へお渡しをいただけるようお願い申し上げます。

ありがとうございました。